

大越俊夫教授送別の辞

山口 宗太

東邦大学医学部耳鼻咽喉科学講座（大橋）医局長

大越俊夫教授は昭和54年より東邦大学医学部附属大橋病院（以下、大橋病院）に勤務され、東邦大学医学部耳鼻咽喉科学第2講座の教授として10年余り当教室を運営されました。また大橋病院では院長補佐、副院長の要職を長らく務められました。臨床、教育、研究すべての分野で成し遂げられたご苦労はいかばかりであったかと、先生の元で学んだ同門、教室員一同、ご苦労をねぎらうとともに、長年にわたるご指導に心より感謝いたしております。

先生がご専門になさっている疾患は睡眠時無呼吸症候群、副鼻腔疾患、エアロゾル療法、咽喉頭異常感など多岐にわたっております。特にエアロゾル療法の研究は先生のライフワークの1つであり、第39回日本耳鼻咽喉科感染症研究会・第33回日本医用エアロゾル研究会では会長を務められました。日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会立ち上げにも尽力され、昨年には第1回の学会総会・学術講演会が開催されております。睡眠時無呼吸症候群に関しては現在ではよく知られる疾患ですが、先生は20年以上前から検査・手術・研究を行っていらっしゃいます。睡眠時無呼吸症候群の領域では耳鼻咽喉科の第一人者としてさまざまな学会・研究会で要職に就かれております。

先生と初めてお話しさせていただいたのは私が医学部の5年生の臨床実習の時だったかと思います。先生がちょうど教授に就任された時期でありましたが、臨床実習での1週間は今でも大変思い出深く残っております。大越先生と私は軟式テニス部の先輩後輩の間柄ですがとても親身に指導していただき、ぜひ先生の元で働きたいと思い軟式テニス部の集まりの時に相談に伺ったことがつい先日のように思い出されます。私が大橋病院で初期研修をしていたときも毎日のように先生とお話ししていたように思います。初期研修時に6カ月間大橋病院耳鼻咽喉科で研修させていただいた時は、先生から直接手取り足とり指導していただきました。鼻鏡の持ち方、綿棒の巻き方といった基本

中の基本から、外来診療、手術に至るまで耳鼻咽喉科の基礎となる全てをその6カ月で学んだように思います。

私が入局したときには今のように医局員は多くない時でありましたので、先生とともに外来・病棟・手術を一体となっていて行っておりました。新人であった私もなんとか力になりたいと思い先生が患者さんにお話すること、手技、手術など吸収できるものはなんでも吸収しようと考えました。さまざまな手技・手術を一緒にさせていただきましたが、今教える立場になりますと先生がいかにか我慢強く指導されていたかがよく分かります。先生はとても優しく穏やかな人柄であります。患者さんに分かりやすく丁寧にお話する姿は今でも勉強になります。先生は臨床において常に患者さんを第一に考えて診療に当たられており、より良い治療を目指して工夫しておられる姿にはいつも感銘を受けておりました。その情熱はすべての臨床医が目指すべきところだと常々感じております。先生は分からないこと、気になることがあるとすぐに調べられ、まだ臨床経験の浅い医師にも意見を求めるなどその探究心にはいつも感服させられます。

先生とは一緒に食事に行くことが多く、特に地方の学会のときには必ずその土地の名物を食べさせていただきました。そして医局員・外来スタッフなどとカラオケに行くことが時々ありましたが、何度聞いても聞き惚れるその声はプロの歌手ではないかと思うほどであります。大橋病院耳鼻咽喉科は軟式テニス部出身の医師が多く、いつか“大越・大木ペア”対“山口・久保田ペア”でのダブルスを実現できればと思っています。

このたび耳鼻咽喉科学講座教授を退任されますが、名誉教授として東邦大学に籍を置かれます。先生のご退任は非常に寂しいかぎりですが、先生の今後のご活躍とご健康を祈念いたしまして、送別の辞とさせていただきます。